文末表現の一考察
―新聞文章を対象として―

卓　星　淑

1. はじめに

述語がその中心をなす日本語の文末表現はいろいろな役割を持っている。

第一に、事実そのものを描く。

第二に、そのものごとを肯定するか、否定するか、すでに実現したか、まだ実現していないかといった判断を表す。

第三に、ものごとについての話し手の態度すなわち、はっきり断定するか、推量するか疑問の余地があるか、意志のある表現であるかを表す。

第四に、話し手の聞き手に対する態度の表現である。ある動作をすることを要求するか、問いかけるか、単にさし示すだけかなど。そして自分側の人物（物）であるか、そうでないかによる待遇表現も重要な要素になる。

最後に、多様な終助詞、アクセントなどで繊細で微妙なニュアンスを持たせ文をしめくくる。（注１）

以上のように日本語の文末表現は多様な要素を含んでいる故、その理解が困難であるとよくいわれている。特に外国人学習者にとって文末表現を、どのように要領よくまとめるか、どのような段階をへて発展させていくかなどが日本語上達の一つの強力なキーでもある。そこで新聞の文章 ― それぞれ表現意図が異なっている報道文・コラム・社説 ― をとりあげ、その文末表現にはどのような差が出てくるかを調べてみることにした。

2. 分析対象と方法

(1)　分析対象

新聞の文章は、①内容による分類（政治、経済、社会、文化等）、②叙述のあり方による分類（報道文、説明文、論説文、広告など)、③書き手による分類（記者か記者でない人か）などで区分することができる。（注２）

分析対象にしたのは報道文、コラム、社説である。上記の分類に即していえば、

内容的にはなるべく幅広く、叙述のあり方の面では報道文、論説文、エッセイに近いコラムを、書き手の面では記者によるものを選んだ。

報道文、コラム、社説の精細は次のとおりである。

○新聞名：朝日・毎日・読売新聞

○期　間：1986年7月1日から8月31日までの61日間（8月4日休刊日除外）

○ここで扱う報道文とは第一面のトップ記事、内政面（政治面）、経済面、社会面の最初の記事にかぎったものである。ただし、経済面の記事は月曜日には掲載されていないため、月曜日の報道文の記事には経済面の記事は含まれていない。

○社説は各新聞の社説である。

○コラムは、朝日新聞の「天声人語」、毎日新聞の「余録」、読売新聞の「編集手帳」でいずれも第一面の下段に掲載されている。

(2)　分析方法

3類21種を基本とし、それを下位分類する方法をとった。

Ⅰ類：「た」系列

①　動詞＋た（例：書いた、述べた、など）

②　形容詞＋た（例：多かった、大きかった、など）

③　動詞＋補助動詞＋た（例：予想されていた、約束してきた、など）

④　～補助形容詞＋た（例：平坦ではなかった、語ってほしかった、など）

⑤　～だった（例：機会だった、平気だった、そうだった、など）

⑥　～であった（例：外相であった、必要であった、是正できるか、であった、など）

⑦　助動詞＋た（「だった」を除く）（例：検出された、失望させた、登場しなかった、など）

⑧　形式名詞＋だった（例：～ということだった、～を問うものだった、など）

⑨　形式名詞＋であった（例：～を維持したのであった、立ちあがったのであった、など）

Ⅱ類：「非た」系列

⑩　動詞の終止形：以下同じ。（例：～という、残る、ある、など）

⑪ 形容詞（例：望ましい、大きい、など）

⑫ 動詞＋補助動詞（「である」を除く）（例：分析している、成り立っている、など）

⑬ ～補助形容詞（例：望ましくない、平気でない、取り組んでほしい、あってよい、など）

⑭ ～だ（例：有様だ、必要だ、なおさらだ、ひねり出すからだ、など）

⑮ ～である（例：是正である、不可能である、あいまいなままである、重視していくのかである、「　」である、など）

⑯ 助動詞（「だ」「た」を除く）（例：欠かせない、～というべきだろう、求めたい、読むべきであろう、など）

⑰ 形式名詞＋だ（例：～あってはならないことだ、起きているわけだ、十分知っているはずだ、など）

⑱ 形式名詞＋である（例：望むべくもないのである、～ないということである、浮かび上がってきたわけである、など）

Ⅲ類：特殊

⑲ 体言止め（例：気配りのいるところ、確定、～六十億ドル、六三％、など）

⑳ 助詞止め（例：～とするのが、「　」と、崩れるわけはないのだから、など）

㉑ その他（例：～いらっしゃいます、！、おやすみなさい、など）

3. 分析結果

前述の３類２１種の項目で報道文、コラム、社説を類別した結果は＜表１＞のとおりである。

＜表１＞を見て全体的にいえることは、新聞の文末表現は「動詞」を主にした文末形式が主流をなしていることである。それに比し「形容詞」が用いられる文末の比率は対照的に少なく「た」系、「非た」系合わせて６％以内である。そして「た」系列と「非た」系列を見ると、ジャンル別に差はあるものの「非た」系の比率が高い。そして「た」系の文末表現のうち、「だった」に比べ「であった」の頻度数が少ない点も目立つところである。

＜表1＞

	文末形式	報道文		コラム		社説	
		出現数	百分率	出現数	百分率	出現数	百分率
I類（「た」系）	①動詞＋た	2,668	27.0	567	16.1	980	9.9
	②形容詞＋た	47	0.5	20	0.6	41	0.4
	③動詞＋補助動詞＋た	527	5.3	157	4.5	273	2.8
	④～補助形容詞＋た	4	0.0	7	0.2	10	0.1
	⑤～だった	151	1.5	118	3.4	86	0.9
	⑥～であった	3	0.0	3	0.1	36	0.4
	⑦助動詞＋た	373	3.8	67	1.9	179	1.8
	⑧形式名詞＋だった	6	0.1	4	0.1	21	0.2
	⑨形式名詞＋であった	0	0.0	0	0.0	5	0.1
	小　　計	3,779	38.2	943	26.9	1,631	16.6
II類（「非た」系）	⑩動詞の終止形（以下同じ）	1,121	11.4	738	21.0	1,351	13.7
	⑪形容詞	171	1.7	138	3.9	492	5.0
	⑫動詞＋補助動詞	1,709	17.3	408	11.6	1,274	12.9
	⑬～補助形容詞	19	0.2	58	1.6	387	3.9
	⑭～だ	413	4.2	244	6.9	406	4.1
	⑮～である	80	0.8	106	3.0	955	9.7
	⑯助動詞	770	7.8	399	11.3	2,247	22.8
	⑰形式名詞＋だ	45	0.5	45	1.3	236	2.4
	⑱形式名詞＋である	7	0.1	14	0.4	394	4.0
	小　　計	4,335	44.0	2,150	61.0	7,742	78.5
III類（特殊）	⑲体言止め	1,606	16.3	251	7.1	96	1.0
	⑳助詞止め	104	1.0	164	4.7	387	3.9
	㉑その他	48	0.5	9	0.3	0	0.0
	小　　計	1,758	17.8	424	12.1	483	4.9
総　　計		9,872	100.0	3,517	100.0	9,856	100.0

つぎに<表１>からジャンル別に見られる特徴的な面を見よう。

まず、報道文はコラムと社説に比し「た」系の比率が高い。これは過ぎ去った事柄を報道するという報道文の基本的機能に由来するのであろう。

報道文の文末形式の中では、「動詞＋た」、「動詞（終止形）」、「動詞＋補助動詞」止めが多く、全文末の５５％を占めている。また「体言」止めが1,６０６文も現われ、この四つの文末形式で全文末の７２％に達する。このことは報道文の文末表現を単調なものにしている。

また、報道文には「（形式名詞）である（であった）」（⑥⑨⑮⑱形式）系の文末が見られないことももう一つの特徴としてあげられる。総文末数9,８７２文の中９０文である。（「だ（だった）」（⑤⑧⑭⑰形式）系は６１５文に対し）

つぎにコラムの全体的な文末表現の分布を見る。コラムの文末は、報道文、社説と比べるとその３類２１種の分布の比率が最もばらついている。Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類の比率も他の二つ程かたよっていないし、多様性を帯びている。その中では「動詞」終止形止めが最も好まれて使われている。「助動詞」止めは報道文よりは多く、社説よりは少ない。「体言」止めは社説よりは多く、報道文よりは少ない。「だ」に対する「である」の比率も報道文とも社説ともある程度距離をおいた数値を示している。コラムのこのような文末表現の様相は簡潔で、口語的で、飾り気の少ない明快なコラム文体と相通ずるところであろう。

社説は三つのジャンルのうち、ある事柄に関し新聞社の立場や主張が最もよくまとまった形で表現される文章である。それ故、社説は論理的で、分かりやすく、そして印象的な文章でなければならない。このような性格を持つ社説の文末形式の様相を見ると、まず、「助動詞」の存在が目につく。社説全文末の22.8％を占める。つぎに他の二ジャンルと違い「（形式名詞）である」（⑮、⑱形式）が、「（形式名詞）だ」（⑭、⑰形式）より多く使われている点である。「だ」を用いる文と「である」を用いる文の文体の差を意識しているということであろう。

しかし、「た」系を見ると「であった」は「だった」より少ないことに注意しなければならない。報道文、コラムは勿論、社説も「だった」１０７文に対し「であった」は４１文しか出現していない。「た」系になると「だった」と「であった」の使い分けは殆んどなくなるということを示唆しているように思われる。

また、報道文やコラムには殆んど使用されない「形式名詞＋だ（である）」の形式が630文も出てくる事実も社説の文末表現の特徴の一つと言える。

次に項目別に分けて三つのジャンルにどのような共通点ないし差異が見られるのかを見ることにする。

報道文には、その特徴として、中立主義、時間の制約、紙面の制約があげられる。ものごとをなるべく客観的に、すばやく、簡潔に表現するために語尾を省略し、また文をつないでいくため長文的表現になりがちであり、文末に体言止めが多くなり、受身表現、引用表現、伝聞表現が頻繁に現われることになる。（注3）

コラムの「天声人語」、「余録」、「編集手帳」はどれも新聞の第一面の下段に載せられている。13字詰め約60行からなる。決められた字数内に、読みやすく、論旨ははっきり示し、結論はできるだけ冒頭に出して読者によくわかるようにする。書く種は鮮度が落ちないうちに、読者にすばやく、正しく、内容を把握させるといったことを目標にしている。（注4）

社説も紙面の制限という面ではコラムの場合と同様であるが、社説やコラムを書く時の筆者の態度はちょうど人々が制服を着る時と普段着を着ている時の心理的変化に似ているところがあるように思われる。社説を書くときは個人の立場でなく、新聞社の立場として記事に接し、判断し、読者に呼びかけるものだからである。

以上のようにそれぞれ性格に差がある報道文、コラム、社説が文末表現にはどのような違いを見せているかを資料をもとにみることにする。

ⅰ）「動詞＋た」と「動詞（終止形）」

報道文、コラム、社説それぞれ用いられている動詞を拾ってみたのが<表2>である。

表から共通していえることは、報道文、コラム、社説いずれもその用いられている動詞の総数のうち、「なる、する、ある、いう」などの特定の動詞の頻度が高いということである。しかし、「た」系と「非た」系を比較してみると、「ある」は頻度が高いが、「あった」はその使用数が少ない。「いう」は「〜という」の形でよく出現しているが、「〜といった」は殆んど現われない。「〜という」はもはや引用表現として慣用語句化しているため「〜といった」と単純比較でき

〈表2〉 三つのジャンルにおける動詞の分布

( )%

文末形式	報 出現数	コ 出現数	社 出現数	文末形式	報 出現数	コ 出現数	社 出現数
なった	351(13.2)	53(9.3)	130(13.3)	なる	167(15.0)	44(6.0)	102(7.6)
した	919(34.4)	102(18.0)	344(35.1)	する	183(16.5)	70(9.5)	151(11.2)
あった	43(1.6)	74(13.1)	62(6.3)	ある	159(14.2)	185(25.1)	404(29.9)
いった	3(0.1)	15(2.6)	3(0.3)	いう	216(19.3)	146(19.9)	115(8.5)
その他の動詞＋た	1,044(39.1)	274(48.3)	338(34.5)	その他の動詞	315(27.8)	239(32.2)	495(36.6)
合成動詞＋た	308(11.6)	49(8.7)	103(10.5)	合成動詞	81(7.2)	54(7.3)	84(6.2)
小計	2,668(100.0)	567(100.0)	980(100.0)	小計	1,121(100.0)	738(100.0)	1,351(100.0)

〈表3〉 三つのジャンルにおける動詞「なる」の分布

文末形式	報 出現数	コ 出現数	社 出現数	文末形式	報 出現数	コ 出現数	社 出現数
名詞＋になった	44	24	20	名詞＋になる	43	18	36
形式名詞＋になった	77	5	22	形式名詞＋になる	56	13	2
形容動詞(語幹)＋になった	54	4	8	形容動詞(語幹)＋になる	11	3	13
～ように(そうに)なった	5	6	22	ように(そうに)なる	1	2	5
～なくなった	4	4	7	～なくなる	1	1	7
～(でなくなった)		助詞＋になった	2	でなくなる			
名詞＋となった	138	2	37	名詞＋となる	44	3	23
形式名詞＋となった	4	0	4	形式名詞＋となる	1	0	2
形容動詞(語幹)＋となった	9	0	0	形容動詞（語幹）＋となる	5	0	6
形容詞(語幹)＋くなった	16	8	8	形容詞(語幹)くなる	5	4	8
小計	351	53	130	小計	167	44	102

ない面を持っているからかもしれない。そして「ある」も三つのジャンルともに多く見られる動詞である。この「ある」という動詞は、普通韓国語の場合「있다」に訳されるが、「있다」に比べ「ある」の意味は幅広いものと思われ、韓国人学習者には留注すべきものである。

その他の動詞の比率は「非た」系では、コラムと社説が高い。報道文はある程度枠にはまったような（決まり文句的な）文が多いため、その使用される文末の動詞もかなり固定化されているのに比し、コラムと社説も報道文とのかかわりからある程度固定化されている動詞もあるが、報道文の叙述の上に書き手なりの考え方を示す文章という点から選ばれる動詞の範囲は報道文より広いものと見られる。しかし、「た」系においては報道文の方が社説より比率がやや高い。それは、「なる、する、ある、いう」のほかに報道文でよく登場する「述べる、予想する、示す、話す、語る」などを「その他の動詞」に含めたためであって、報道文の方が社説より「た」系において多様な動詞が用いられているためではなかった。

そして、合成動詞を一項目として立てたのは、日常会話のなかで合成動詞の存在がたくさん含まれているように思われ、書きことばの場合はどのような様相を帯びているのかを見るためであった。結果を見ると、三つのジャンルにそれほど大きい差はなく、７～８％台におさまっていた。

次に、「なる」と「する」という動詞は助詞、名詞、活用語尾と結合した形で出現する。それを細かく分類してみたのが＜表３＞と＜表４＞である。

動詞「なる」は、まず助詞「に」と「と」を基準に分けてみた。「非た」系においては、名詞または形式名詞は「になる」の方が多く見られる。ただし、「名詞＋となる」も「名詞＋になる」と並行してよく使われている。「た」系は「非た」系とやや違う分布をみせている。「名詞＋となった」が報道文で１３８文、社説に３７文で「名詞＋になった」の４４文、２０文より多く見られる。しかし、コラムでは「名詞＋になった」の方が多い。この分布から考えられるのは、動詞「なる」が助詞「に、と」をとる場合、「非た」系ではそれほどはっきりした区別はないようだが、「た」系になると「～になった」にするか「～となった」にするかの使い分けがまだ存在しているのではないかという事実である。

しかし、「なる」の前に形式名詞がくる場合は「となる」はまれで、助詞「に」を受け、「～になる」という形が殆んどである。

「形式名詞＋なる」を詳細にみたのが＜表３－１　である。表で見るように、「ことになる」が殆んどである。そして「ものになる、こととなった、ものとなった」が少数みえるだけで、その他の形式名詞「はず、わけ、ところ」などに「なる」が続く文末形式は出現していない。

＜表３－１＞　形式名詞＋なる

文末形式	報	コ	社	文末形式	報	コ	社
	出現数	出現数	出現数		出現数	出現数	出現数
ことになった	76	5	20	ことになる	54	13	1
ものになった	1	0	2	ものになる	2	0	1
小　　計	77	5	22	小　　計	56	13	2
こととなった	1	0	2	こととなる	1	0	0
ものとなった	3	0	2	ものとなる	0	0	2
小　　計	4	0	4	小　　計	1	0	2

次に＜表４＞の「する」の分布をみよう。

動詞「する」は、新聞の文章では「～した」の形態が多い。特に「漢字2字＋する(した)」が主流をなす。「した／する」全体の「漢字２字＋した／する」は報道文、コラム、社説の「する」総数の $\left\{ \frac{691}{919} / \frac{129}{183} \cdot \frac{78}{102} / \frac{45}{70} \cdot \frac{274}{344} / \frac{103}{151} \right\}$ で平均しても６０％以上を占める。この比率は新聞文章である故のことであろう。

漢字以外の外来語に「する」が接続される形が殆んど見えなかったことは意外だった。｛外来語＋した／する、報道文５文／７文、コラム１文／３文、社説３文／０文｝外来語のはんらんとはまだ広告文、西欧から入った料理、ファッションなどの領域にとどまっているようだ。しかし、それが必要以上に拡大され（私の目によくつくところに書かれてあって）、外来語だらけと思われているのかもしれない。

報道文に１０４文出現している「形容動詞語幹＋にした」は「～明らかにした」

＜表4＞ 三つのジャンルにおける動詞「する」の分布

文末形式	報	コ	社	文末形式	報	コ	社
	出現数	出現数	出現数		出現数	出現数	出現数
漢字1字＋した	22	6	17	漢字1字＋する	15	3	10
漢字2字＋した	691	78	274	漢字2字＋する	129	45	103
漢字3字＋した	12	0	3	漢字3字＋する	8	2	3
漢字4字＋した	14	0	0	漢字4字＋する	4	0	1
漢字5字＋した	0	0	0	漢字5字＋する	1	0	0
名詞・副詞＋した	18	6	9	名詞・副詞＋する	9	4	5
が、を＋した	15	4	13	が、を＋する	5	1	15
名詞＋にした	8	3	2	名詞＋にする	2	6	4
形式名詞＋にした	13	0	3	形式名詞＋にする	0	0	0
形容動詞語幹＋にした	104	1	13	形容動詞語幹＋にする	1	0	2
助動詞語幹＋にした	0	0	0	助動詞語幹＋にする	3	0	0
名詞＋とした	5	1	2	名詞＋とする	4	0	2
形式名詞＋とした	1	0	1	形式名詞＋とする	0	0	0
助動詞語幹＋とした	4	1	5	助動詞語幹＋とする	0	2	5
とした	9	1	1	とする	0	0	0
形容詞語幹＋くした	1	0	1	形容詞語幹＋くする	0	0	0
〜たりした	1	1	0	〜たりする	0	6	0
その他	1	0	0	その他	1	0	0
小計	919	102	344	小計	183	70	151

が殆んどである。その他、副詞、助詞などと結合して出ていた形は、「　」とする、～う（よう）とする、異にするなどの用法である。

ii）「形容詞＋た」と「形容詞」

形容詞は「た」系の出現は極く少なく、1％未満である。「非た」系の比率は報道文1.7％、コラム3.9％、社説5％で、報道文から社説の方にいくにつれて多くなる。コラムと社説の形容詞の比率が報道文より高いのは形容詞の性格が報道文では除去されうる面を持っているし、「～いい」とか「悪い」とかいった感情の表現というのは報道文の性格とかけ離れているからであろう。

＜表5＞　社説における「形容詞」の分布

文末形式	出現数	文末形式	出現数
～かった	38	～い	363
		～ほうがいい	6
		～ようがない	4
		～までもない	21
		～ほかない	17
しかなかった	3	～しかない	13
		なくはない	4
		べくもない	1
		間違いない	11
		違いない	20
		～そうにない	3
やすかった		～やすい にくい	29
小　　計	41	小　　計	492

＜表5＞は社説に見える形容詞の分布である。一般的な形容詞＜大きい、多い、望ましい、…＞の他に「～がいい」「～ようがない」「までもない」「に違いない」など他の形式と結合された形でもよく出現している。この類の形容詞群はその意味の面では助動詞的な要素を持っているので慣用語句的助動詞の枠に入れるべきではなかったのかと思われる。

iii）「動詞＋補助動詞＋た」と「動詞＋補助動詞」

この文末形式は日本語の文末形式のなかで、特に新聞文章の文末形式としては主流をなす形式といえる。「動詞＋補助動詞」の文末形式は、過ぎ去った事実を「た」でまとめられるのに対し、現在の状態を「～ている（ある…）」で表わす日本語の動詞の用法から当然、新聞の報道文、コラム、社説にこの文末は出現数がきわめて多い。報道文で

は「動詞＋た」2,668文に続く1,709文も出ている。

三つのジャンルの「動詞＋補助動詞」をまとめてみたのが<表6>である。

<表6>　三つのジャンルにおける「動詞＋補助動詞」の分布

文末形式	報	コ	社	文末形式	報	コ	社
	出現数	出現数	出現数		出現数	出現数	出現数
動詞連用形＋ていた	377	101	85	動詞連用形＋ている	1,694	361	1,213
〃　＋てきた	129	39	150	〃　＋てくる	3	18	24
〃　＋てしまった	8	7	30	〃　＋てしまう		11	20
〃　＋てくれた	1	4	2	〃　＋てくれる		3	1
〃　＋ていった	4	2	6	〃　＋ていく	10	9	9
〃　＋てみせた	2	1					
〃　＋てあった	3	1		動詞連用形＋てある	2	2	4
〃　＋てみた	2	1		〃　＋てみる		1	1
〃　＋てやった	1	1		〃　＋ておく		3	2
小計	527	157	273	小計	1,709	408	1,274

「ている、てくる、てしまう、てくれる、ていく、てある、てみる、ておく、てやる」の中で「〜ている／いた」が圧倒的に多く見られる。「〜ている」は前にくる動詞によりその意味が違ってくるが新聞文章で多いのは「検討している、予想されている」など現在の状況を表現する動詞群である。

この文末形式の用法は外国人学習者が自分の文章を書くとき最も基本になるものと思われる。

そこで最も多く見られる「〜ている」の前にどのような形式がくるのかを詳細にみたのが<表７>である。

「〜ている」は、「(さ) せる、(ら) れる」を伴う場合と「動詞＋ている」の場合とに分かれる。

使役の助動詞「(さ)せる」を伴う場合は少ない。使役の意味からであろう。「(ら)れる」を伴う場合は報道文、コラム、社説それぞれ「(ラ)レテイタ／(ラ)レテイル」が$\frac{55}{377}$文・$\frac{192}{1694}$文、$\frac{11}{101}$文・$\frac{41}{361}$文、$\frac{21}{85}$文・$\frac{221}{1213}$文ずつである。「〜ている」文全文末数の１０％以上を占めている。「(ら)れる」という助動詞は本当に日常的な助動詞のように思われる。

漢字２字に「ている、(ら)れている」がつく形は三つのうち報道文が最も首位を占める。コラムは「する、なる」以外の動詞に「ている」が接続した形が多く見られる。これと対照的に「漢字＋ている」の形は５５文で全体の１５％位である。漢字の与える規格的なニュアンスを避けているのであろう。

「〜になっている」はコラムと社説の場合大部分であったが、報道文には「〜となっている」も91文（「〜になっている」71文に対し）出ている。「〜となる」は「〜になる」より報道文の意図する明確さとマッチしているようである。

ⅳ）「〜補助形容詞＋た」と「〜補助形容詞」

補助形容詞はまず、「長くない、本物でない、健康的でない」など形容詞と形容動詞の否定形を取りあげた。報道文とコラムはこの種の補助形容詞が大半であった。否定形の他に「〜てほしい、ばいい、ていい」の形もここに入れて分類した。この類は社説に最も多く見られる。「〜てほしい」が７７文、「〜て(ば、たら)いい」が５９文出ている。社説の全文末数から見ると小数であるが、このような文末が社説に特徴的に現われるということは重要なポイントといえるだろう。

＜表７＞　報道文における「〜ている」の分布

文末形式	出現数	文末形式	出現数
		漢字２字＋させている	4
動詞＋(さ)せていた	5	動詞＋(さ)せている	7
合成動詞＋(さ)せていた	4	合成動詞＋(さ)せている	
漢字１字＋されていた		漢字１字＋されている	
漢字２字＋されていた	15	漢字２字＋されている	48
漢字３字＋されていた		漢字３字＋されている	7
〜されていた	2	〜されている	4
とされていた	3	〜とされている	7
にされていた		〜にされている	
動詞＋(ら)れていた	29	動詞＋(ら)れている	105
合成動詞＋(ら)れていた	5	合成動詞＋(ら)れている	20
動詞＋(ら)れ＋動詞＋ていた	1	動詞＋(ら)れ＋動詞＋ている	1
漢字１字＋していた	1	漢字１字＋している	10
漢字２字＋していた	54	漢字２字＋している	303
漢字３字＋していた		漢字３字＋している	6
漢字４字＋していた		漢字４字＋している	2
していた	17	〜している	16
としていた	4	〜としている	125
にしていた	5	〜にしている	38
〜を、が、していた		〜を、が、している	
〜したりしていた	1	〜したりしている	1
〜くしていた		〜くしている	2
〜となっていた	6	〜となっている	91
〜になっていた	18	〜になっている	71
〜からなっていた		〜からなっている	1
〜くなっていた	2	〜くなっている	8
〜なっていた	1		
動詞＋ていた	169	動詞＋ている	705
合成動詞＋ていた	35	合成動詞＋ている	112
小　　計	377	小　　計	1,694

V）「助動詞＋た」と「助動詞」

助動詞は形態的特徴としては、常に他の語に付属して用いられる語のうち、活用を有するものをいう。特に動詞の後に添え、表現主体の種々の判断を加えるものが多いということから「助動詞」という名称が付けられたという。（注５）しかし、助動詞と判断するかいなかはとても難しい問題である。ここで助動詞として拾ったのは＜表８＞で見るとおりである。

各ジャンル別の助動詞の出現数をみると、報道文 770文（7.8％）、コラム 399文（11.3％）、社説 2,247文（22.8％）である。社説が断然トップである。その内訳を順によってみていこう。

報道文では客観的表現のため、いわゆる「受身表現、引用表現、伝聞表現」がよく使用されるという。受身の助動詞「(ら)れる」を見ると、「(ら)れる」は364文（47.3％）、「(ら)れた」は263文（70.5％）を占めている。報道文には「～(ら)れている、られていない、られるらしい、られるようだ」などの形も多く出現している。客観的表現と「(ら)れる」は一致しているのだろうか。

田中章夫「語法からみた現代東京語の特徴」『国語学』（S．33．9）などによると、「非情の受身」のうち「～と言われる、～と見られる、～期待される」など現代語で多用される多数の人物、集団が動作主となり、叙述内容がきわめて客観的に事務的に述べられる用法は、受身の意識が薄く、「自然可能な受身」とも呼ばれる。この種の用法は、明治十、二十年代以降、外国語の影響とともに演説、講演など公用語の世界で多用された事が影響しているとみられるとある。

実際、報道文で用いられる文末は、「みられる、予想される、注目される、実施される、いわれる」などいわゆる「非情の受身」が大部分を占めているが、「～思われる、考えられる」のいわゆる自発も少数見られる。書き手は非情の受身と自発の意味の差をどのくらい念頭においているのだろうか。「思われる」は自発といわれるが、客観的に、婉曲に無難にものごとを表現したい時、私自身「思われる」と書いているのでその境界線をひくのは難しいのではないかと考えている。

新聞報道文における受身表現は日本語本来の迷惑の受身の意味はなく、新聞文章の客観的で事務的に叙述するのに適切な決まり文句化されているのかもしれな

〈表8〉 三つのジャンルにおける「助動詞」の分布

	報	コ	社		報	コ	社
文末形式	出現数	出現数	出現数	文末形式	出現数	出現数	出現数
(さ)せた	41	3	12	(さ)せる	11	9	18
(ら)れた	263	46	126	(ら)れる	364	46	188
なかった	68	17	37	ない	110	133	714
				らしい	33	31	4
				そうだ(推定)	153	4	15
ようだった	1			ようだ	51	7	49
				だろう	8	121	373
				う、よう	40	7	274
たかった			2	たい		11	411
				ごとし		1	
				みたいだ		2	
				まい		3	131
				そうだ(伝聞)		24	4
べきだった		1	2	べきだ			66
小計	373	67	179	小計	770	399	2,247

い。

コラムに見える受身は「た」系は助動詞の大部分を示すが、「非た」系では46文しか出ていない。社説の方も188文で助動詞の10％未満にすぎない。これは「(ら)れる」という助動詞がそのもつ意味が助動詞的性質が弱いということを露呈しているものと思われる。いいかえると、個人、または新聞社の意見なりムードを綴る社説やコラムには多用されない助動詞ということであろう。

つぎに推定、推量の助動詞といわれる「そうだ、ようだ、らしい」を見よう。報道文は「そうだ、ようだ、らしい」の順に、コラムは「らしい、ようだ、そうだ」の順に、社説は「ようだ、そうだ、らしい」の順に用いられている。（表8参照）

推定の助動詞「そうだ」は、コラムと社説にはそれほど使われておらず、報道

＜表9＞　三つのジャンルにおける
助動詞「そうだ(推定)」の分布

	報	コ	社
文末形式	出現数	出現数	出現数
動詞連用形＋そうだ	84	3	6
〜ことになりそうだ	19		1
名詞＋になりそうだ	23		
名詞＋となりそうだ	2		1
形容詞(く)＋なりそうだ	2		
形容動詞＋になりそうだ	2		
形容詞＋そうだ	1	1	4
（補助形容詞）〜ことができそうだ	1		
〜て＋補助動詞＋そうだ	6		3
〜　されそうだ	12		
〜　させそうだ	1		
小　　計	153	4	15

文の方に多数見られる。「動詞」の連用形に「そうだ」がつくのが一般的である。特に「なりそうだ」の形がよく出現している。助動詞「そうだ」が社説、コラムに比べ報道文に多く見られるということは、推定助動詞「そうだ」は情報が確かでその事柄の具体的実現が推定できる時よく選択される助動詞であることからではないかと思われる。

次に「ようだ」であるが、「ようだ」は報道文と社説ともに少数であるが、殆ど同じ程度の数値を示している。コラムには7文しか出ていない。コラムには「そうだ」も4文しか出ていない。それに比べ報道文に「そうだ、ようだ」が「153文、51文」出てくるということは報道文とコラムの文のスタイルとも関連があるように思われる。（表10参照）

「らしい」の分布は<表11>のとおりである。社説には殆どなく、報道文とコラムに33文、31文ずつ見られる。全文末数から考えるとコラムの「らしい」の比率が一番高いということになる。また、コラムは「そうだ」「ようだ」に比べても「らしい」の出現数は多い。

「らしい」がコラムに多く見られ、「社説」に殆ど見られないということは、コラムと社説の性格も合わせて考えると、推定助動詞「らしい」は客観的で少々婉曲的なイメージの「ようだ」に比し、直接的に書き手が推定する部分があるのではないかと思われる。

次に伝聞を表す助動詞「そうだ」は報道文に1文も出ない。社説には4文見えるだけである。しかし、コラムに24文出ており、報道文や社説に比べると格段に多い。

報道文に伝聞形式が多く見られると一般的にいわれるが、「そうだ」は適切な表現形式ではないようだ。その代り、コラムにこの形式が24文出ているのは、情報が明確でなくともコラムの話題にすることはできるからだと思われる。

次に「だろう、う、よう」をみよう。

<表12>は社説に現われる「だろう、う、よう」を分類したものである。「う、よう」の意味用法は推量以外に意志、誘いで使われるが、報道文、コラム、社説には推量の用法が殆どであった。

報道文の場合この推量助動詞の「だろう」が8文に対し「う、よう」が40文であった。報道文に推量の助動詞が出現することは常識的に予想できなかったが、

<表10> 三つのジャンルにおける助動詞「ようだ」の分布

	報	コ	社		報	コ	社
文末形式	出現数	出現数	出現数	文末形式	出現数	出現数	出現数
名詞＋のようだ	6	1	4	名詞＋だった（であった）ようだ		1	2
動詞、形容詞＋ようだ	10	1	11	動詞、形容詞＋たようだ	16	1	9
〜ているようだ	13	2	11	〜ていたようだ	1		1
〜ではないようだ	1		1				
〜ないようだ	2	1	6	〜なかったようだ	1		1
たいようだ			1	〜られたようだ	1		2
				小計	51	7	49

<表11> 三つのジャンルにおける助動詞「らしい」の分布

	報	コ	社		報	コ	社
文末形式	出現数	出現数	出現数	文末形式	出現数	出現数	出現数
名詞＋らしい	1	7	1	名詞＋だったらしい		2	1
動詞、形容詞＋らしい		6	2	動詞、形容詞＋たらしい	20	6	
であるらしい		2					
ているらしい	4	2		〜ていたらしい	3	2	
ではないらしい		1					
ないらしい		2		なかったらしい		1	
				(ら)れたらしい	5		
				小計	33	31	4

＜表 12＞ 社説における助動詞「だろう、う、よう」の分布

文末形式	出現数	文末形式	出現数
名詞＋だろう	41	名詞＋であろう	38
形式名詞＋だろう	60	形式名詞＋であろう	25
形容動詞語幹＋だろう	30	形容動詞語幹＋であろう	13
何、なぜ（疑問詞）＋だろう	7	副詞＋であろう	1
動詞＋だろう	80	動詞＋う、よう	124
動詞＋補助動詞＋だろう	17	動詞＋補助動詞＋よう	10
形容詞＋だろう	32	てよかろう	6
ないだろう	33	形容詞語幹＋かろう	2
なかっただろう	1		
ではないだろう	8	なかったろう	2
られるだろう	2	ではなかろう	4
べきだろう	50	(ら)れよう	20
助詞＋だろう	12	べきであろう	25
		名詞＋だったろう	2
		名詞＋であったろう	1
		形容動詞語幹＋だったろう	1
小計	373	小計	274

岩淵悦太郎氏が指摘しているように報道文は以前は単に事実を忠実に記述しようとしていたのに対して近年の記事の作り方は読み手を意識し、読者に働きかけ、読者に説明しようという態度で書かれているのではないかと思われる。（注 6）この傾向は社会面の記事が特にそうであるように思われる。社会面の記事は第一面の記事とか内政、経済面の記事とそのおもむきが違い、わたしたちのごく身近なところで起こる事件がおおい。それらの事件のなかできわめて大きく、きわめてショッキングな事件にはどうしても書き手の気持が露出されたりする。実際読者の一人として私自身もそのような文に出会うと親しみと同時に新鮮さをおぼえることがある。これからの記事の書き方もすこしずつ変化していくのではないか

と思われる。

報道文は「だろう」に比し、「う、よう」の方が多かったのに対し、コラムは正反対の様相である。「う、よう」は7文、「だろう」は121文である。仮に「だろう」を口語的表現、「う、よう」を文章語的表現というならば、コラムは完全に口語に近い文章ということになる。

社説は＜表12＞のとおりである。「だろう」が多く出現しているが、まだまだ「う、よう」の方も健在である。

三つのジャンルの「だろう、う、よう」の分布から「う、よう」にくらべ「だろう」の方が多用されているということと同時に「だろう」と「う、よう」の区別も存在しているという事実を確認した。

その他、社説に見られる助動詞を見ると、「べきだ、～なければならない、～てはいけない」「～たい」などが目立つ。これらは社説の最も基本的に必要な文末表現である。社説はあることがらを解説し、新聞社なりの考えを読者に示し、読者に訴えたり、読者に期待をかけたり、強くある方向を主張したりするのである。社説に助動詞の比率が高いということは、書き手の事柄に対する態度、読者に対する態度が助動詞の比率だけ表現されたということであろう。

vi）「だった／であった」と「だ／である」

文末形式「だった」と「であった」は三つのジャンルとも非常に低い比率である。「形式名詞＋だった／であった」を含めても使用度が一番高いコラムが3.6％で、報道文と社説は1％もない。それに「であった」で終る文末は三つの総文数23,245文のうち、わずか47文にすぎない。「だった」の文は386文出現している。（＜表1＞を参照）

しかし、「だ／である」の分布を見ると報道文とコラムは「だ」の方が「である」より頻繁に使用されている。報道文に「だ」形式が多いのは少しばかり意外であったが、コラムの場合は「である」より「だ」の方が多用されているのは、なるべく短かく、明快な文章のためであろうと思われた。

しかし、それが社説になると、「だ／である」の様相が逆になる。＜表13＞のとおりである。「である」の方が「だ」の倍近く使われている。「だった」と「であった」は三つのジャンル共に「であった」は殆んど見られなかったのに対し、

<表13> 社説における「だ／である」の分布

文末形式	出現数	文末形式	出現数
名詞＋だった	68	名詞＋だ	242
形容動詞語幹＋だった	13	形容動詞	86
副詞＋だった	1	副詞＋だ	4
助詞＋だった	2	助詞＋だ	69
文＋だった	2	文＋だ	5
小計	86	小計	406
名詞＋であった	25	名詞＋である	608
形容動詞語幹＋であった	7	形容動詞語幹＋である	134
副詞＋であった	1	副詞＋である	12
助詞＋であった	1	助詞＋である	85
文＋であった	1	文＋である	32
べきであった	1	べきである	61
		ようである	16
		そうである	7
小計	36	小計	955

「だ／である」はジャンルにより、「だ」の方が好まれる場合と「である」が好まれる場合とに分かれているのだ。

一般に「だ」は会話（口語）で、「である」は文章でという認識があるが、実際、使用されている資料をみると、「だった」と「であった」はその区別が殆どなくなり「だった」の方に傾いていく傾向があるようだが、「だ／である」はいぜんとしてその使い分けがなされ、より文章語的文体に多く見られているのであろう。

vii）「形式名詞＋だった／であった」と「形式名詞＋だ／である」

「形式名詞＋だ／である」の項目は、文が一旦成立できる状態に「こと、もの、

の、はず、わけ、ところ」が「だ」または「である」を伴い完結される文を指す。この種の文は形態的にもまた、意味的にも一つの特徴を持つものと思われ一つの項目として立ててみた。

この形式は<表1>でも分かるように「た」系は殆ど出現していない。最も多い社説でさえ26文にすぎない。これはこの文末形式のもつ意味から「た」系が少ないのであろう。これは「助動詞＋た」の用法が少ない事実とも関連して考えられることである。

「非た」系の三つのジャンルにおけるこの形式の分布をみると、報道文とコラムは、0.6％、1.7％の比率をしめており、社説は6.4％をしめている。

報道文にこの種の形式がなぜ出てくるのか疑問であるが、その例をみると、「〜が違っているわけだ、補おうというわけだ、表面化したわけだ、〜方法を探るというものだ、その真意が問われるところだ」などである。形式名詞はそれぞれの持つ意味はすこしずつ違っているが、共通的にいえることは筆者が一旦まとめた文に対しもう一度テコ入れをするということであろう。中立的な立場で客観的にものを書くという報道文の性格からこの種の文末形式を期待していなかったので少々意外に思われた。その一方、報道文は記事の書き方もその種類により、書き手が解説風に書いたり、強調したりするなど書き手のことがらに対する態度がはみ出るケースもあるようだ。

コラムの場合は「だ」系が45文、「である」が14文出てくる。動詞の終止形止めが多いのと対照的にこの種の文末形式は決して多いとはいえない比率である。それはコラム自体ができるだけ短かい文章をめざしているその性格上から当然の結果かもしれない。

「形式名詞＋だ／である」の文末のなかで「〜のだ／のである」が17文、「はずだ／である」が17文で大半を占める。「はずだ」はある程度自分が判断の中心になる形式で、「のだ」はある状況を読者とともに理解しようと図るまたは相手に理解させようとする書き手の気持がこめられた形式なので、コラムに他の形式より比較的多いのがうなづける。

社説には予想どおり「形式名詞＋だ」が236文、「形式名詞＋である」が394文出てくる。「である」系が多いのは(Ⅵ)で指適したとおりである。この形式は社

説にきわめてふさわしい表現であるということであろう。社説でものごと、事件などから読者に何かを訴えたい、または考えさせたい時、「もの、の、こと、はず、ところ、わけ」などの形式を用い、解説的に、論理的に説明し、その意図するところを効果的に表現しているのだろう。（注7）

社説における「形式名詞＋だ／である」

＜表14＞　「形式名詞＋だ」

文末形式	出現数	文末形式	出現数
ものだった	10	ものだ	48
ことだった	8	ことだ	88
のだった	1	のだ	30
ところだった		ところだ	11
わけだった		わけだ	16
はずだった	2	はずだ	43
小　計	21	小　計	236

＜表15＞　「形式名詞＋である」

文末形式	出現数	文末形式	出現数
ものであった	2	ものである	50
ことであった	1	ことである	152
のであった	2	のである	138
ところであった		ところである	8
わけであった		わけである	9
はずであった		はずである	37
小　計	5	小　計	394

＜表14.15＞を見ると、「ことだ／である」240文、「のだ／である」168文、「はずだ／である」が80文、「ところだ／である」は19文、「わけだ／である」が25文ずつ出現している。表でみると、形式名詞「こと、の」は「である」と接続した方が多い。「もの、ところ、わけ、はず」は「だ」の方がすこし多かったり「である」の方が多かったりするが、それほど目立つ差ではない。

報道文は先述したように「だ」の方が殆どである。（「のだ」は1文、「のである」は2文であるが例文が少ないので、判断できない。）特に「ものだ」は29文に対し「ものである」は2文しか出ていない。

コラムも「だ」系が多いが、「もの」は「だ」系「ものだ」が多く、「のだ」

と「のである」は、9文、8文で差がない。

その他の形式名詞も「だ」と「である」それぞれ結合している。

以上の事実から、形式名詞が後に「だ」をとるか、「である」をとるかはやはりその文体から決められることであるようだ。

viii）体言止め

体言止めは、新聞文章の一つの代表的文末であると一般的にいわれている。各ジャンル別の「体言止め」の比率は<表1>を見ると、それぞれの文末総数に対し、報道文16.3％、コラム7.1％、社説1％である。報道文は新聞において代表的文章といえるので、「体言止め」は新聞文章の最も代表的文末形式といえるかもしれない。

<表16>報道文における「体言止め」

文末形式	出現数
名　詞	666
数　詞	284
形式名詞	81
形容動詞語幹	41
サ行動詞　〃	409
動詞の名詞形	125
小　計	1,606

<表16>は報道文の「体言」止めを分類したものである。「名詞」の中に分類したのは、固有名詞、普通名詞と考えられる（方針、一言、特徴、理由、正念場）などの類いである。「数詞」に入れたのは三千百四十六人、～万円、六十隻、四人など数詞を含むものである。

「動詞の名詞形」とは動詞の連用形で名詞の用法として使われているもので、たとえば見直し、見通し、疑い、割れ、切り上げなどである。この類はもはや名詞と思われるが、形態的に動詞の連用形という形をしているので分類してみた。

「サ行動詞語幹」は「漢字2字～4字」の単語で「する」または「した」が省略されたと見られるものが主で、外来語（スタート、Vサイン、エスカレート）と、ガックリ、ビックリなどを含む。動詞「する」の項目でも漢字2字と結合した形が多数あったが、体言止めにも「漢字2字」は多数見られた。

コラムの「体言止め」には「サ行動詞語幹」が少ないのが報道文と異なった傾向であった。特に「漢字2字」の体言止めは9文しか出現しなかった。同じ体言止めでも使われているのが報道文かコラムかによって好まれる体言が違うことが分かった。

社説では数詞で終わる体言止めが多い反面「サ行動詞の語幹」止めも少なく、全体的に社説には「体言」止めが少ない。それは社説の持つ体裁をととのえた文章という面から生じた結果であろう。

ⅸ）「助詞止め」

助詞止めは<表1>を見ると、比率はコラム、社説、報道文の順になっている。

報道文に見られる助詞は格助詞（から、に、と、へ、で）、副助詞（も、まで、など、くらい、ばかり、だけ、ほど、のみ）、並列助詞（とか）、終助詞（か）などであった。

コラムには格助詞、副助詞、接続助詞、並列助詞、終助詞が出てくるが、最も多いのは疑問を示す「～か、～のか、～だろうか、～ではないか」であった。

社説は「助詞止め」387文のうち、「か」が376文であった。その詳細は次の<表17>のとおりである。

<表17> 社説における「助詞止め」

文末形式		出現数
格助詞	から	3
	と	3
接続助詞	のに	2
	たり	2
副助詞	など	1
終助詞	～か	53
	のか	76
	だろうか	115
	ではないか	120
	～か、どうか	12
小計		387

コラムにも「か」は多数見られるが、社説における「か」の数に比べるとずっと少ない。それは社説が常に読者を意識し、読者に話しかけたり、問いかけたりすることが要求されているから、この種の文末形式が多く見られるのだろう。

ⅹ）その他

報道文では、疑問記号(?)、副詞、「動詞の連用形＋そう」で終わる文末をこの項目に入れた。

コラムには9文出てくるが、それは「お忘れなく、ありますか、～になりました、～汗かきでいらつしゃいます、出してくれ、～？」などの表現である。コラムならではの自由で気の利いた表現である。

4. 結　　び

以上、報道文とコラム、社説というそれぞれ異なった意図から書かれた三種類の文章を「た」系と「非た」系、特殊という三本立てで大きく分類し、それを21種の項目を立て分けてみた。その結果、予想通り、それぞれ、文末表現に特徴が出てきた。

報道文の代表的文末表現は「動詞＋た」「動詞＋ている」「体言止め」で、この文末表現は過ぎ去った事件ないし事柄を読者に感情をまじえずに中立的な立場から伝えるのにふさわしい文末表現であることがこの分析で分かった。

コラムには「動詞の終止形」が最も多く見られる。簡潔で圧縮された感じを与えるこの表現はコラムの文体になくてはならない存在である。その他21種の文末形式が三つのジャンルの中では一番平均的に散ばっていた。多彩な文末形式を駆使し、コラム独特の魅力的文体を生み出していることが分かった。

社説は報道文、コラムに比べ最も体裁をととのえた文章としての特徴がその文末表現によく現われている。それは「だ」系より「である」系の文末が好まれて使用されている点、体言止めが少なく用いられている点などからうかがえる。

そして、社説には「助動詞」の文末が群を抜いて現われている。社説は「(ら)れる、～しなければならない（いけない）、べきだ、～たい、てほしい、ていいようだ、そうだ、～ものだ、ことだ、のだ、～だろうか、～ではないか、～ではないだろうか」など助動詞または助動詞的語句を用い、社説の本来の意図するところが読者に受け入れられるように巧みに表現しているのである。

以上のように今回は形態面を中心に文末の様相を見たが、次回は意味の面から文末表現を分類、まとめたいと思っている。

「以上」

（注１）　南不二男「敬語」『柴田武編現代日本語』P 32 ～ 33

（注２）　鈴木英夫「新聞の文体」『講座日本語』8 P 175 ～ 179、小林英夫「冗語率をどうすべきか　新聞文章教室(3)」『新聞研究』143号

（注３）　鈴木英夫上記論文

（注４） 藤倉輝夫『新聞の文章』P 130～136

（注５） 『日本語教育事典』 助動詞項目P 144～146

（注６） 岩淵悦太郎「新聞文章教室(1)報道文章の変化」『新聞研究』141号

（注７） 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味』P 261～305